

『説得』

— Anne Elliot と ‘an Elegance of Mind’ —

中尾真理*

Anne Elliot and ‘an Elegance of Mind’

Mari NAKAO

要旨

アン・エリオットは「洗練された知性」と「優しい性格」の持ち主として描かれている。「洗練された知性」とは何を意味するのだろうか。オースティンは従来から「理性」と「感性」のバランスのとれた精神を理想としてきたが、それとどこが違うのだろうか。以上の観点から、オースティン最後の作品『説得』について考察する。

ヒロインは家族からも、コミュニティからも切り離され、孤独の内に移動を続ける。斜陽の准男爵家から、大家族の暖かい雰囲気を残す郷土（スクワイア）のマスグローヴ家、ライム海岸、そして、最後にエレガントな温泉保養都市バースへの孤独な旅の過程で、アンの洗練された知性はそれぞれのグループにどのように反応し、また、どのようにして心からの共感者であるウェントワース大佐の心を掴むことができたのだろうか。

鍵はやはり、感性とモラルに求めるべきだろう。

(I) heroine と narrative の変化

ジェイン・オースティン (Jane Austen) の最後の完成作『説得 (Persuasion)』¹⁾ のヒロイン、アン・エリオット (Anne Elliot) は27歳、小説のヒロインとしては異例の高年齢である。Austen のこれまでのヒロインは17歳から21歳、これはちょうど、当時の結婚適齢期にあたる。結婚年齢の高齢化が進む現代日本ならいざ知らず、27歳という年齢は19世紀初頭のイギリスでは、決して若くない年齢である。

Anne Elliot は「もう若くない」だけでなく、過去に失意の経験を持つヒロインである。彼女は19歳の時、任官されたばかりの若い海軍大佐ウェントワース (Captain Wentworth) に出会ったが、結婚には至らなかった。准男爵 (baronet) の家名に誇りを抱いている父親サー・ウォルター・エリオット (Sir Walter Elliot) と、同じく母親代わりのレイディ・ラッセル (Lady Russell) に、地位も財産もない海軍軍人と結婚するのは「自分を捨てるような行為 (a throwing away)」だと「説得」され、結婚を断念したのである。

この出来事は Anne に深い傷を残した。彼女は説得に屈したことを後悔し、Wentworth を忘れることができなかった。その結果、彼女の美貌と若さは、早く色あせてしまった。しかも、皮肉なことに Wentworth はその後、出動命令を受け、対ナポレオン戦争で沸く海上でひと財産を得たのである。

このような設定で Anne Elliot の物語は始まる。と言うのも、*Persuasion* は Anne Elliot の物語だからだ。Elliot 家の存続継承というテーマもあるが、こちらは肝心の継承者があいまいなままに終わっている。エリオット氏 (Mr. Elliot) の陰謀が、スミス夫人 (Mrs. Smith) の打ち明け話で発覚するという脇筋は、喜劇のプロットとして十分発展しそうだが、中心的な扱いを受けないままに終わっている。それは結局、ヒロインの Anne が、Elliot 家の存続継承にはそれほど関心を抱いていないからだと思われる。Anne の関心は Wentworth という新しい世界に属する人物に向けられ、どうやら彼と共に、閉ざされたジェントルマン (gentleman) の世界を後にして、外の世界へ踏み出す気配のうちに小説は結末を迎えるのである。

とはいえ、人生に失望を味わい、美貌も若さも色あせた27歳のヒロインである。この時点ですでにこの作品は、いわゆる Austen の小説の特徴とされる幾つかの常識を越えていると言えるだろう。Austen といえば、gentleman の安定した地方生活を背景に、「田舎の3・4家族」²⁾ と称される小さなコミュニティに生きる若い女性を主人公に、その生き方、特にその結婚をめぐる喜劇を主題とするというのが、常套手段である。だが、この小説は幾つかの点で、そうした枠組みからはずれている。第一に、ヒロインは若い女性ではない。第二に、安定した gentleman の生活は危うくなっており、田舎の3・4家族はもはや中心を占めてはいない。なにしろ、Elliot 家が領地 (estate) で准男爵らしい生活を続けられなくなったところから、この小説は始まるのである。当主 Sir Walter は Kellynch Hall³⁾ を貸しに出し、田舎の生活を離れて、小都会バース (Bath) へ移ってしまう。小説の約半分は Bath が舞台である。登場人物もその3分の1が海軍の関係であり、人も場所も gentleman だけの世界から、東インド、ジブラルタルを視野に収めた、より大きな世界になっている。

第三に、家族の無力化がある。Austen の小説では家族が大きな意味を持っているのは周知の通りである。家族は殆ど社会そのものを意味すると言ってもよい。だが、その家族がここでは求心力を失って、Elliot 家は分解寸前である。Anne は父の Sir Walter から姉のエリザベス (Elizabeth) から「いてもいなくてもいい人間 (nobody)」と見られている。だが、Anne の方でも、父と姉を必要としてはいないし、むしろ、価値観を異にする家族からの「遊離 (isolation)」を仕方のないことと受け止めている。

さらに、この小説で注目すべきは、前々作『マンスフィールド・パーク』 (*Mansfield Park*) に続いて、従来の Austen 小説の魅力である喜劇的なタッチが薄れていることだろう。これまでの彼女が持っていた「物語の道徳的問題に読者を巻き込もうとする」積極的な姿勢、喜劇作家に特有の「アイロニカルな挑戦的要素」というものが、この作品ではますます希薄になっている。⁴⁾

喜劇的タッチが陰をひそめて何が浮かび上がってきただろうか？

作者とヒロイン、ヒロインと読者の間に介在する喜劇的ナレーターがいなくなったことで、ヒロインと作者の間の距離が近くなったと言えるだろう。Anne は作者とほぼ同じレベルで、観察し、コメントし、要約している。作者もヒロイン及び読者に対するアイロニカルな挑戦を捨てたことで、初めて自分の視点をヒロインのそれに重ね合わせることができたのではないだろうか。人生の挫折を味わった「もう若くない」ヒロインであるからこそ、執筆当時、40歳で

あった作者にとっても十分「成熟」したヒロインと見なすことができたのだろう。その結果、この小説は凝縮され、テンポが早く、時に驚くほど辛辣な批評をも交えて展開されている。読者にとっても、この小説は作者の率直な感情を、より直接的な形で感じることができるという意味で、これは Austen の他のどの小説よりも現代的である。

(Ⅱ) 移動するヒロイン

象徴的な意味合いにおいてであるが、Anne Elliot には、地域社会との絆が薄くなり、自分にふさわしい居場所を求めてさすらう孤独な現代人を予感させるものがある。彼女には、強い絆で結ばれた家族もなく、村という地域社会（コミュニティ）と密接に結ばれた土地（estate）もない。物語の始まる時点で、Anne の一家は Kellynch Hall の家を出ることを余儀なくされる。Elliot 家は経済的に行き詰まっており、その打開策として Sir Walter は先祖伝来の家を土地もろとも賃借に出し、自分は Bath に仮住まいして、赤字財政の修復に励まねばならなくなったのである。

家を失うということ自体が、家族にとってある象徴的な意味を持つが、Anne は Bath に移るにあたり、家族からも見捨てられた自分を再確認することになった。父も姉も Anne を必要とはしていなかった。というも、Elizabeth は companion として、おべっかつかいのクレイ夫人（Mrs. Clay）の方を選び、Anne は妹のメアリ（Mary Musgrove）のもとに滞在せざるをえなかったのである。

gentleman にとって「土地」を失うということは、その存在基盤を失うことに等しい。gentleman の娘である Anne にとっては、家族からもコミュニティからも切り離されるという状態になったのである。

以後、Anne はアッパークロス（Uppercross）から Bath へと居場所を転々とする。まず、Sir Walter が Kellynch Hall を出た後、一家の友人 Lady Russell の家に移り、そこから、妹 Mary の嫁ぎ先のマズグローヴ家（the Musgroves）に二カ月滞在し、そこから再び、Lady Russell のケリンチ・ロッジ（Kellynch Lodge）に戻り、さらに父 Sir Walter の落着き先 Bath のカムデン・プレイス（Camden-place）の家へ移る。

この6カ月にわたる長い移動は、孤独な個人としての Anne の姿を浮き彫りにしている。家族からもコミュニティからも離れ、Anne は孤独を深めるが、一方、それによって Anne の世界は広がったとも言える。それは未知の人々（海軍）との出会いをもたらし、真の共感者（Wentworth）を得る結果をもたらしたからである。Anne の孤独な移動は、Anne が nobody から「花の盛りのヒロイン（blooming heroine）」へ復活する軌跡でもある。

(Ⅲ) 斜陽の一家と知性の孤立

Anne の家族である Sir Walter と Elizabeth が、Anne の真価を理解し得ないのは、彼らに「本当の理解力」(true understanding) が欠けているからだとなレーター＝作者は言う。true understanding とは、「知性」(intelligence) であろう。

… but Anne, with an elegance of mind and sweetness of character, which must have placed her high with any people of real understanding, was nobody with either father or sister; her word had no weight; her convenience was always to give

way; she was only Anne.

……だがアンは、本当に理解力のある人間なら誰だって高く評価したに違いない、洗練された知性と優しい性格の持ち主でありながら、父にとっても、姉にとっても、どうでもいい人間なのであった。彼女の言葉には何の影響力もなく、彼女の便宜はいつも顧みられなかった。彼女はアンにすぎなかったのである。(p.5)

Sir Walter と Elizabeth には Anne の人柄を理解する知性が欠けている、Anne が家族の中で孤立するのはやむを得ないことであり、解決の見込はないといわんばかりである。

Sir Walter は准男爵年鑑をひも解くことと、54歳になった自分と29歳になった Elizabeth が、いまだに美貌を保っていることを唯一の自慢にしている愚かな人間である。彼は「育ちのよさのお手本 (a model of good breeding)」(P.32) と見なされては喜び、baronet の名にふさわしい外見を保持することに汲々としている。准男爵の称号 (title) の魅力など、甥の Mr. Elliot (Sir Walter の相続予定者) に完全に黙殺されたにもかかわらず、である。⁵⁾ なにしる、Elliot 家の財政が危機に陥っているというのに、Sir Walter にはその重大さがよく飲みこめない始末なのである。彼は居間に幾つもの姿見を置き、准男爵年鑑の Elliot 家の記載を読んで、自己満足に耽っているが、こうした Sir Walter の描き方には、彼には救済の可能性を一切、認めないという作者の冷たい割り切りが感じられる。

一方、主人公の Anne Elliot について Austen は、「彼女は私には善良すぎます」と述べている。⁶⁾ 「善良すぎる (too good)」というのが具体的に何を示すかが問題だが、人物像としての Anne が「理想的にすぎる」という意味でこのようなコメントをしたと考えてよいだろう。Anne Elliot には an elegance of mind と sweetness of character の両方が備っているという。これはどういうことであろうか。彼女は Fanny Price と同じように、感覚が繊細で、物腰は優しく (gentle)、いかにも sweetness of character の持ち主である。だが、それだけではない。an elegance of mind とは、理性と感性のバランスのとれた、理想的な知性の働きが、洗練された優雅なマナーを伴って現れるという意味ではないだろうか。

Anne Elliot は穏やかな外観にもかかわらず、鋭い洞察力を持っている。彼女の洞察力はすべてを見通し、何物を見逃さない。

だからこそ、海軍グループの特徴である、飾り気のない、率直な言動に Anne は大いに感心しながらも、洗練の点では劣ることに気がつくのである。人柄の良いハーヴィル大佐 (Captain Harville) は次のように描写されている。'Captain Harville, though not equalling Captain Wentworth in manners, was a perfect gentleman, unaffected, warm, and obliging. Mrs. Harville, a degree less polished than her husband, seemed however to have the same good feelings.' 「……マナーの点ではウェントワース大佐に及ばないものの、気取りがなく、温かみがあって、親切で、完璧な紳士だった。ハーヴィル夫人は洗練の点からいえば夫より一段劣っていたが、同様に親切な心の持ち主のように見えた。」(p.97)

マナーの良しあし、洗練の度合いに Anne は特に、敏感である。よく引き合いに出される場面だが、Anne には Mrs. Musgrove のでっぷりした体格と、彼女が死んだ息子のために流す涙がつりあわないと考えて、内心で笑いをこらえるという一面もあるのだ。(p.68)

だが、Anne はその鋭い洞察力を、人生体験の深さで和らげる術をも知っていた。彼女は経験から、真実に対し、しなやかな対応をするだけのゆとりをもっている。Anne の知性は成熟

した知性なのである。だから彼女はエリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) やエマ (Emma Woodhouse) のように知性を過信する余り、人に騙されるなどということはない。Anne に好意をもっていただけると思われたベンウィック大佐 (Captain Benwick) がルイーザ (Louisa Musgrove) と婚約した知らせを聞いても、Anne はさほど驚かない。‘The answer soon presented itself. It had been in situation. They had been thrown together several weeks …… She was persuaded that any tolerably pleasing young woman who had listened and seemed to feel for him, would have received the same compliment. He had an affectionate heart. He must love somebody.’ 「答えはすぐにわかった。問題は状況にあったのだ。二人は数週間一緒にほうり出されていたのだ……彼の話に耳を傾け、彼に同情的と見える、我慢できる程度に感じのよい若い女性なら誰でも、同じほめ言葉を受けていたであろう。彼は愛情深い人間だった。誰かを愛さずにはいらなかったのだ。」 (p.167) とすぐに事の真相を見抜いてしまう。

また、Captain Benwick の人物についても、そのバイロン風の気取りなどには幻惑されない眼識をアンは持っており、この件の結論としては、‘The conclusion of the whole was, that if the woman who had been sensible of Captain Wentworth’s merits could be allowed to prefer another man, there was nothing in the engagement to excite lasting wonder……’ 「Wentworth 大佐の良さを理解できていた女性が、別の男性を好きになるなどということが認められるならば、この婚約にはそういつまでも驚くほどのことはないのだ」 (p.167) ときわめて冷静な反応を示している。

このように冷めた観察のできる Anne であるから、Mary の夫、Charles Musgrove の人物について次のようなコメントも出てくるのである。

…… though …… Anne could believe, …… that a more equal match might have greatly improved him; and that a woman of real understanding might have given more consequence to his character, and more usefulness, rationality, and elegance to his habits and pursuits.

……もっとふさわしい結婚をしていれば、彼はもっと良くなっていただろう。本当の知性を身につけた女性なら、彼の性格にもっと威厳を与え、彼の習慣と趣味により有用性と合理性、そして優雅さを与えていただろう……と、アンは思っていた。 (p.43)

Anne は妹の Mary についても true understanding がないと見ている。true understanding のある妻ならば、Charles Musgrove の行動様式にも elegance がそなわるはずである。Anne にとって true understanding は、行動として必ず、外に現れるものである。それがマナーというものである。何故なら、知性と、洗練された形式美 (elegance) とは深い関係を持っているものなのだ。

このような考えに基づいて、Anne は大変感じがよいマナーの持ち主である Mr. Elliot に期待するのである。

He was quite as good-looking as he had appeared at Lyme, his countenance improved by speaking, and his manners were so exactly what they ought to be, so polished, so easy, so particularly agreeable, that she could compare them in

excellence to only one person's manners. They were not the same, but they were, perhaps, equally good.

彼はライムで見かけた時と同じように立派に見えた。彼の顔は話し始めるとさらに一層引きたった。そして彼のマナーは非常に洗練されており、非常に気楽で、とりわけて気持ちのよい、まったく申し分のないものであったので、彼女はその見事さにおいて比較できる人はたった一人しかいないと思うほどだった。それはまったく同じとは言えなかったが、恐らく、同じ程度に立派なものであった。(p.143)

Anne は申し分のないマナーの彼を、sensible man であると見たが、その印象は間違っていないなかった。後に彼女は Bath で、Mr.Elliot のように「頭のよい、明敏な知性」(a sensible, discerning mind) (p.143) の持ち主と親しく話をできることに、喜びを見出しさえするのである (p.144)。

(IV) 知性とモラル

Austen が理性 (sense) と感性 (sensibility) を常に表裏一体をなすものと考え、その両方を兼ね備えることを理想としていたことは、Austen の小説の読者なら誰でも気づくことである。sense は単なる「利口さ」(cleverness) とは違い、intelligence、或いは、true understanding に通じるものである。⁷⁾ Austen にとって、知性は常に深い関心事であった。

『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*) では頭のよい皮肉屋のベネット氏 (Mr.Bennet) と利発なエリザベス (Elizabeth Bennet) が、コリンズ氏 (Mr.Collins) の馬鹿さ加減を嘲笑する。『知性と感性』(*Sense and Sensibility*) は、E.M. Forster が *Howards End* で描いたのと同じ状況設定で、知識人姉妹が、sense も sensibility も鈍い人々の中で苦勞をする話である。特に芸術家肌で、自我をコントロールすることの下手な妹のメアリアン (Marianne) が深く傷つく。『ノーサンガー・アビー』(*Northanger Abbey*) はヘンリー・ティルニー (Henry Tilney) の軽やかな知性が魅力的で、ソープ兄妹 (John and Isabella Thorpe) の鈍重な俗物性と鮮やかな対照をなしている。

『マンスフィールド・パーク』(*Mansfield Park*) のヒロインは sense と sensibility を深く秘めており、そのために、回りの人々に理解されない悩みを持っている。Fanny Price には、よりオープンで優れた知性と感性の持ち主、メアリ・クロフォードとヘンリー・クロフォード (Mary and Henry Crawford) が対比されており、読者は最後までこれらの人物の判断に迷うのである。だが、決め手は Crawford 兄妹の moral 上の欠陥である。

『エマ』(*Emma*) で扱われていたのは、己が知性を過信したヒロインが陥る知性の畏である。フランク・チャーチル (Frank Churchill) はエマに劣らぬ才気あふれる人物で、Emma は鏡の中に自分の姿を映し出すように、Frank の知性と感性の魅力にほれ込んでしまい、結果的に騙されてしまうのである。

このように、Austen のヒロインたちは知性が特徴で、その知性 (sense) はまた、優れた感受性 (sensibility) をも示すものであった。だが、Austen を理解するには、これだけではまだ不十分で、これに moral の問題を考慮に入れる必要がある。Austen の小説にはよくヒロインを惑わす「魅力的な悪党」(anti-hero, villain) が登場する。彼もまた、ヒーローと同じように傑出した人物でなければならない。ウィロビー (Willoughby) やウィカム

(Wickham) の場合を思い出していただきたい。hero と villain を分かつのは道徳性の点だけなのである。知性と感性は Austen にとって大事な徳目だが、moral は全てに優先する、最も重要な徳目なのである。Mr. Elliot がマナーと sense の点では Wentworth に匹敵するとされながら、結局、villain であると判明するのは、この moral が問題になるのである。

同じことが Sir Walter と Elizabeth の場合にも言える。彼らが「虚栄心の強い愚か者」であるだけなら、Mr. Woodhouse や Mrs. Allen や Lady Bertram と同じように好人物になることも可能だっただろう。だが、同じ「愚か者」(fool) でも、Sir Walter には Mr. Woodhouse や Lady Bertram が持っていた「誠実さ」が見られない。moral の問題に関して Anne は作者以上に厳格である。彼女は、Sir Walter が在地地主 (resident landholder) としての義務を果たしていないと手厳しく批評している。実際、Kellynch Hall を明け渡すにあたって、必要な雑事を処理し、主立った家を訪問して別れのあいさつをしたのは、Anne であり、Sir Walter でも Elizabeth でもなかった。Kellynch Hall の事実上の管理権が、無責任な Sir Walter から Admiral Croft の手に移ったのは、むしろ小作人 (tenants) にとって良いことだったと Anne は考えるのである (p.125)。

Lady Russell の sense はどうであろうか。Lady Russell は立派な moral の持主で、その判断力の優れていることは Kellynch 界限でよく知られている (p.11)。だが、Lady Russell には偏見がある。彼女は Sir Walter と同じように家柄に対するコンプレックスを持っているのだ。Wentworth との結婚をあきらめるように、Anne に間違っただ説得をしたのは、そもそも彼女だったではないか。この偏見があるために彼女は Admiral Croft の「心の善良さ」(goodness of heart) と「素朴な性格」(simplicity of character) を理解することができない。Lady Russell には Anne のように、Admiral Croft の余り洗練されてない manners を受け入れるだけの心の広さがない。従って、Lady Russell は「沈着な心と丁寧なマナー」(composed mind and polite manners) の持ち主ではあるが、知性と感性の理想的な一致を示す「洗練された知性」(an elegance of mind) の持ち主とは言えないということになる。

このようにまず第一にモラルがあり、次に Austen は知性 (understanding, sense, intelligence 等の言葉で表される) を大事にしたが、彼女の場合、知性は、必ず、それを感じとるアンテナとしての、繊細で興行きの深い感受性 (sensibility, feeling 等の言葉で表される) と一体になるものである。そして、そのような知性と感性のバランスのとれた人間の社会的行動として、「マナーのよさ (good manners)」を考え、対人関係における「人あたりの良さ (agreeableness)」をも重視するというのが、彼女の基本姿勢である。『説得』ではこの点の要求水準がさらに高くなり、マナーの良さを単なる「人あたりの良さ」に止めておかないで、「洗練された優雅さ」の域に達することを理想としているように思われる。

例えば、Anne Elliot である。この作品には「優雅」(elegance) あるいは「優雅な」(elegant) という言葉が多用されており、これを一種の key word と考えてもよいだろう。Elizabeth が Bath の居間のマントルピースの上に「優雅な時計」(the elegant little clock) を置き (p.144)、「小規模だが、このうえなく優雅なティー・パーティ」(a regular party — small, but most elegant) (p.220) を開こうとするのは、皮肉な使われ方の例だが、ヒロインの Anne にもたびたび elegant という言葉が使われていることに注目したい。Anne がかつての学友 Mrs. Smith の前に現れた様子は、次のように描写されている。

Twelve years had changed Anne from blooming, silent, unformed girl of fifteen,

to the elegant little woman of seven and twenty with every beauty excepting bloom, and with manners as consciously right as they were invariably gentle……

12年の歳月がアンを花の盛りの、黙りがちな、まだ体のできていない15歳の少女から、花の盛りこそ過ぎてはいるものの、非常に美しく、いつも物柔らかであると同時に、意識的に礼儀正しい、27歳の、小柄で優雅な女性に変えていた。(p.153)

そもそも Anne は、音楽だけでなく、イタリア語の素養があり、Austen のヒロインの中でも最も教養の深い女性である。この美しい小柄な女性の elegance は、単に sense と sensibility のバランスのよい結び付き以上のものを示しているように思われる。

(V) love story と sensibility

Persuasion はその底を流れる深い哀切な感情が魅力である。その感情は Anne Elliot 独自のものである。Anne は若い Henrietta や Louisa が屈託なく笑いさざめく中で、晩秋(11月)の清澄な景色と、'some tender sonnet, fraught with apt analogy of the declining year, with declining happiness, and the image of youth and hope and spring, all gone together' 「失われ行く季節を適切なたとえで歌った哀切なソネット、失われゆく幸福と、全て失われてしまった若さと希望と春のおもかげを歌った歌」(p.85)とを重ねあわせようとする。declining happiness への哀惜、the declining year を惜しむ心、この感情が、*Persuasion* の全編を支配する感情だと言ってもよいだろう。

この Anne の喪失感の原因は、8年前の Captain Wentworth との別れに端を発している。

He was, at that time, a remarkably fine young man, with a great deal of intelligence, spirit and brilliancy.

彼は当時、溢れるばかりの知性と、覇気と、輝きに満ち、おどろくほどハンサムな青年だった。(p.26)

だが、このような個人的魅力を Sir Walter も Lady Russell も評価しなかった。結局、周囲の説得に従った形で、Anne は Captain Wentworth の求婚を断ったのだが、彼女の愛情は今も変わっていない。その気持ちを Anne は後に 'All the privilege I claim for my own sex …… is that of loving longest, when existence or when hope is gone' 「存在が失われ、希望が失われても長く愛するのは女性の特権」(p.235)であると Captain Harville に向かって表現している。この失われ行く幸福、見込みのない愛という感情は、物語の前半を支配し、後半に入ってもなお、余韻を引きずって、終盤まで続く。というのも、これは見込みのない愛の物語であり、それが奇跡的に復活するのは終盤に至ってからのことだからである。

Persuasion は Sir Walter が Admiral Croft に Kellynch Hall を貸した後、Anne と Wentworth を中心に筋が展開し始める。Captain Wentworth が再び、Anne の前に現れる。8年前よりさらに容貌に男らしい磨きがかかり、25,000ポンドという財産を引っ提げての登場である。だが、彼の前には青春の真っ盛りにある Henrietta と Louisa の姉妹がいた。

前にも述べたように、*Persuasion* は Anne の意識に焦点をあてて、語られている。Fanny

Price の場合と同様、Anne は「感受性の強いナレーター」(sensitive narrator)である。秘めた愛は人の心を鋭敏にするが、Anne の場合、それが殆ど希望のない愛であるだけ、情感は一層、深いのである。Anne は、常に状況を正しく把握しているだけでなく、「秘めた思い」があるゆえに誰よりも深く感じることができる。作者は Anne の「こめられた思い (pent-up feeling)」が読者に伝わるよう様々な工夫をしている。

例えば、Anne が 8 年たった今も Wentworth を忘れていないことは、彼女が海軍の事情に精通していることからわかるしかけである。Elliot 家の顧問弁護士が借家人候補者として Admiral Croft の名を出したとき、

… and Anne, after the little pause which followed, added.

“He is the rear Admiral of the white. He was in the Trafalgar action, and had been in the East Indies since; he has been stationed there, I believe, several years.”

アンは、その後のちょっとした沈黙の後で、付け加えた。

「その方は白色艦隊の海軍少将です。トラファルガーの作戦に参加していた方です。その後、東インドへ行っておられました。確か、数年前からその地で勤務しておられたと思います」(pp.21-22)

この短い言葉から、Wentworth と別れた後も彼女が海軍名簿 (navy list) を読んでいること、しかも Wentworth の義兄の消息を正確に把握するほどの、熱心な読者であったことが推察されるのである。口を開く前にしばしの間を置いているが、Sir Walter への遠慮と共に、万感の思いが込められていることを示す間である。

同じように、Anne の「秘めた思い」はしばしば彼女を一座の中で最も洞察力のある人に行っている。顧問弁護士も Sir Walter も思い出せない副牧師の名前を、Anne はすぐに答えることができた。

After waiting another moment —

“You mean Mr. Wentworth, I suppose,” said Anne.⁸⁾

一瞬、間を置いた後、

「ウェントワースさまのことではありませんか」とアンは言った。(p.23)

Anne はここでも一瞬の間を置いている。

Captain Wentworth は Kellynch Hall の Admiral Croft 夫妻の元に現れ、Musgrove 家を訪れるようになった。Anne は大家族の交流の中で、否応なしに彼と同席することが多くなった。二人が初めて顔を合わせる場面は、ナレーターとしての Anne の感性が極限にまで研ぎ澄まされ、意識が集中されていることを示す文体である。

In two minutes after Charles’s preparation, the others appeared; they were in the drawing-room. Her eye half met Captain Wentworth’s; a bow, a curtesy passed; she heard his voice — he talk to Mary, said all that was right; said something to

the Miss Musgroves, enough to mark an easy footing: the room seemed full——full of persons and voices——but a few minutes ended it. Charles shewed himself at the window, all was ready, their visitor had bowed and was gone; the Miss Musgroves were gone too, suddenly resolving to walk to the end of the village with the sportsmen: the room was cleared, and Anne might finish her breakfast as she could.

チャールズの予告の二分後に、他の者たちが現れた。彼らは居間にいた。彼女の目は半ば、彼の目と会った。お辞儀と、会釈が交わされた。彼女には彼の声が聞こえた——メアリと話をしている。この場にふさわしいことを言っている。マズグローヴ姉妹に何か話しかけた。こころやすいことを示す話ぶりである。部屋は一杯のようだった——人と声で一杯だった——だが、それも数分間で終わった。チャールズが窓際に現れ、みんなも用意ができた。客(Wentworth)はお辞儀をし、行ってしまった。マズグローヴ姉妹も急に、狩りに行く男性たちと一緒に村のはずれまで歩いていくことに決め、行ってしまった。部屋は人気がなくなった。アンは好きなように朝食を済ましてよいのであった。(pp.59-60)

ここでは、Anne が意識的に視線を伏せ、目の代わりに、耳とその他すべての知覚に神経を集中して Wentworth の存在を感じとっているのがわかる。

鋭敏で繊細な感性を持つ者同志は、言葉を交わさなくても、お互いに理解しあうものである。*Persuasion* の今一つの魅力は、優れた感性の持ち主である Anne と Captain Wentworth が、言葉のやり取りなしに、お互いに理解し合う過程が描かれていることだろう。彼らは言葉に頼らず、視線と視線で、いわば、sensitivity と sensibility で交流をするのである。

Wentworth は 8 年前に Anne が自分の求婚を受けず、周囲の「説得」に従ったことで、プライドを傷つけられ、今も Anne を許してはいなかった。そのため、二人は再会後も意識的に接触を避け、大勢の中では他人よりもよそよそしい間柄となってしまった。どうしても必要な時に他人行儀な口をきくだけで、会話など成立するべくもない。始め、Anne はこのよそよそしさ (estrangement) に堪らない孤独を感じる。だが、Musgrove 家の大家族の中で、二人は徐々に緊張を解きはじめ、交流し始めるのである。お互いの存在を感じることから始めて、視線を合らし、表情を読み取り、そして、理解するようになるのである。

Anne と Wentworth の交流の仕方は、鋭敏な感性を持つものだけがわかるようなやり方である。例えば、Winthrop への長い散歩の場面では、Wentworth は Anne が Admiral Croft の馬車に乗れるように取り計らってやる。全ては一瞬のうちに行われた。

……and Captain Wentworth, without saying a word, turned to her, and quietly obliged her to be assisted into the carriage.

ウェントワース大佐は一言も言わず、アンの方を振り向いて、静かにアンを促し、手を貸して馬車に乗せた。(p.91)

彼も Anne も一言も発しない。だが、Anne には、彼が彼女の疲労ぶりに気づいていたことが分かるのである。それは、さらに、'She understood him. He could not forgive her, but

could not be unfeeling.’ 「彼女は彼を理解した。彼は彼女を許すことができなかった。だが、非情でもいられなかったのだ。」 (p.91) という理解へ至るのである。

同じように、Lyme の海岸で Anne が通りすがりの見知らぬ紳士 (実は、Mr. Elliot) から称賛の眼差しを受けたとき、

Captain Wentworth looked round at her instantly in a way which shewed his noticing of it. He gave her a momentary glance—a glance of brightness, which seemed to say, “That man is struck with you, and even I, at this moment, see something like Anne Elliot again.”

ウエントワースは瞬時に、自分もそれに気がついたことがわかるようなやり方で、彼女を振りかえって見た。彼は一瞬の視線でアンを見た——きらきらした視線で、こう語っているようだった。「あの男はあなたに見とれているのです。この僕でさえ、この瞬間、昔のアン・エリオットを見ているような気がします。」 (p.104)

そして、Anne もこの雄弁な「一瞬の、きらきらした視線」の意味を正しく了解するのである。

また、Bath の「白鹿亭」(White Hart Inn) で、Wentworth が Elizabeth から招待状を受け取ったとき、Mary は彼の気持ちを誤解するが、‘Anne caught his eye, saw his cheeks glow, and his mouth form itself into a momentary expression of contempt, and turned away, that she might neither see nor hear more to vex her.’ 「Anne は彼の視線を捕らえ、彼がほおを紅潮させ、唇を一瞬、軽蔑の表情にゆがめ、それ以上彼女が当惑するようなことを見ないでいように、あちらを向くのを見た。」 (p.227) のであった。Anne は彼の視線から、「Elliot 家のプライド」(the Elliots’ pride) に対する彼の相変わらずの軽蔑の念と、それを Anne に知らせまいとする心遣いとを読み取るのである。こうしたお互いの理解の仕方、Austen の他の heroine には見られないことである。

(VI) Musgrove家

J.P. Brown は『『説得』における過激なペシミズム』‘The Radical Pessimism in *Persuasion*’ という論文の中で、*Persuasion* はコミュニティという基盤を失った孤独な個人を描いたものと述べている。Brown によれば、エリオット一家は孤独な、傷ついた個人の寄せ集めであり、既に本当の意味での家族をなしていない。Sir Walter も Mr. Elliot も妻をなくした「やもめ」(widower) である。しかも、Elizabeth と Anne は婚期を逸した old maid、Mrs. Clay は未亡人である。(更に言えば、Captain Benwick も婚約者をなくしており、Mrs. Smith は未亡人で病身である)

そのうえ、この傷ついた個人の集まりである Elliot 一家の間には、通い合う愛情もなく、利己心と虚栄心だけで辛うじて結びついている。ご承知のように、Austen のこれまでの作品では、家族は堅固なもので、ヒロインは否応なしに家族の一員であり、結婚によって家族を選ぶことはできても、家族を無視することはとてもできない相談だった。だが、*Persuasion* では家族は力弱い存在である。それは家族がコミュニティという基盤を失ったためと解される。Brown はこのように考えて、*Persuasion* の状況がヴィクトリア時代の大眾社会を予測する

ものだとしている。Anne は「感じやすい、考える人間」(sensitive and thinking person)であり、Anneの孤独は、社会で孤立する「ヴィクトリア時代の知識人」の孤独に重ね合わせる事ができるというのである。⁹⁾

だが、家族は本当にコミュニティという基盤を失ったのだろうか。また、家族と個人に関する Austen の基本的な考えに、本当に変化があったのだろうか。Elliot 家とは対照的な Musgrove 家という家族も登場するが、これをどう考えたらいいのだろうか。

Kellynch Hall を出た後、Anne は妹の Mary の嫁ぎ先 Uppercross の Musgrove 家に滞在する。Musgrove 家は Elliot 家に次ぐ財産家の地主で、古い郷士 (squire) の家柄である。だが、その生活様式は Elliot 家とはまるで違っている。

Anne had not wanted this visit to Uppercross, to learn that a removal from one set of people to another, though at a distance of only three miles, will often include a total change of conversation, opinion, and idea.

アンは今回のアッパークロス訪問を待つまでもなく、ひとつの人々のグループから別のグループへ移ることは、たとえそれが3マイルの距離にすぎなくても、しばしば、話すことから、意見、発想法まですっかり変わってしまうものだという事を知っていた。(p. 42)

在地地主としての実態を失ってしまった Elliot 家と異なり、Musgrove 家は今もしっかりとコミュニティに根をおろしている。家族としての Musgrove 家の特徴は、大家族であることだろう。いわば、スープの冷めない距離に親子三代が住む形である。先祖伝来のお屋敷 (Great House) には Musgrove 夫妻が、結婚前の二人の娘と、古いイングランドの様式 (old English style) で住んでいる。Musgrove 夫妻は旧世代の人間で、'friendly and hospitable, not much educated, and not at all elegant' 「親しみやすく人を歓待する人達で、教育は余りなく、少しも洗練されていなかった」(p.40) と描写される。彼らは今、新しい時代の波を受けており、二人の娘がこの家に新式の改良 (improvement) を持ち込んでいる。一方、Great House からわずか4分の1マイルしか離れていないところには、結婚した息子の Charles が、新式のヴェランダやフランス窓のついた新居 (Uppercross Cottage) を建て、妻の Mary と二人の子供と暮らしている。

Musgrove の新旧両家の間では頻繁に行き来があり、'the family-habits...of everything being to be communicated and every thing being to be done together, however undesired and inconvenient' 「たとえどんなに嫌でも、また、不便でも、必ず、すべてを知らせ、すべてを一緒にする」(p.83) という家族の習慣があった。この頻繁な交流こそが、Musgrove 家の大家族としての形態を示すものである。こういった大家族的なシステムには面倒な側面もあり、例えば、もし Henrietta と Louisa が二人だけの散歩をするつもりでいても、やはり、分家の Mary を誘わずにはおられないのである。すると、Mary は Mary で 'And yet they would not be pleased if we had refused to join them. When people come in this manner on purpose to ask us, how can one say no?' 「でも行くのを断れば、あちらは気を悪くするでしょう。こんな風にわざわざ誘いに来られては、とても嫌とは言えないわ。」(pp.83) とそれを受けるのである。Henrietta と Louisa の困った表情を見て取った Anne が気転をきかし、自分も同行することに決めるエピソードはこうした両家の

事情をよく表している。いっそ数の多いほうが、Henrietta と Louisa の望む privacy が保てるだろうと Anne は考えたのである。こうした Musgrove 家の在り方を、Anne は驚きの念をもって眺め、「とても思慮のない (highly imprudent)」ことだと考えている (P.40)。ここでは Anne は明らかに、大家族に飲み込まれまいとする個人主義の側に立っている。Anne は第三者として、しばしば両方の側から不満を聞かされる立場にあり、双方に不満のあることを知っているからである。大家族には大家族の欠点があるというわけだ。

しかし、この Musgrove 家を、個人が孤立している Elliot 一家と比べてみると、家族の絆を大事にする家族らしい家族として、より好意的に描かれていることは否定できない。地主としてコミュニティにしっかり根差した生活をしている Musgrove 家には、縁戚としての Anne をも受け入れるだけの懐の大きさがある。Anne もこの一家に対して、限らない親しみと愛着を感じていることは確かである。Sir Walter と Elizabeth は軽薄な人物と決めつけられているが、Charles Musgrove と Mary の人物像は好意的に描かれている。Charles は大家族の長男という立場をよくわきまえ、少々、妻 Mary の the Elliots' pride を持て余しているが、全体としてはのんきで、スポーツ好きの若い地主、義姉 Anne に対しても親切な好人物として描かれている。また、Mary も少々ノイローゼ気味で、自己中心的な性格だが、決して冷淡ではない、可愛らしい人物で、発展可能なふくらみをもつ character である。これは作者=Anne の彼らへの関心の深さを物語ると考えてよいだろう。

Uppercross では家族が健在であり、Austen 的な gentry の世界も安泰である。Uppercross の場面を読む限り、読者は「田舎の 3・4 家族」を扱った見慣れた Austen の世界を見出す。だが、その Uppercross も Anne にとっては単なる通過地点である。永久に留まっていたいところではないのだ。東インドやジブラルタルにまで出掛けたクロフト夫人 (Mrs. Croft) を登場させたのは、作者に Uppercross の限界を際立たせる意図があったと考えられよう。また、読者としても、Anne が賑やかな大家族の善意の中にあっても、孤独に悩まされていることに気づかざるをえない。その孤独は Wentworth と Henrietta、Louisa の姉妹の flirtation に対する嫉妬などという単純な原因によるものではない。それは失恋とは別の形の孤独、Anne と Uppercross の文化的な洗練度の違いによる孤立感である。

Musgrove 家の生活様式は、優雅で、洗練された Elliot 家のそれとは好対照をなしている。Anne が Elliot 家の空虚な洗練に批判的であることは確かだが、かといって、Musgrove 家の「古風で雑多な混乱」ぶりに、もろ手を挙げて賛同の意を示しているわけでもない。幸せそうな Henrietta と Louisa をうらやましく思う Anne だが、だからといって ‘she would not have given up her own more elegant and cultivated mind for all their enjoyments’ 「彼らの楽しみを手に入れるために、自分のより洗練された、教養のある心を捨て去ろうとまでは思わなかっただろう」 (p.41) ということもまた事実なのである。

(VII) Bath での孤独

次に、Uppercross の対極にある Bath での生活を検討してみることにしよう。Anne は Uppercross から Lady Russell に送られて Bath の Camden-place の家へ到着した。Bath は温泉保養地であって、ボー・ナッシュ (Beau Nash) の優雅な社交の場として摂政時代にもてはやされたところである。Napoleon 戦争以後、Bath のかつての隆盛は既に陰りを見せていたというが、各地から高貴な避寒の客や金のある新興ブルジョアたちが湯治に訪れるところで、いわば、田舎の gentleman が冬の season を過ごす小 London のような趣を持ったと

ころである。小規模ながら、Bath の町が都会の機能を備えた町であることは、舞台が Bath へ移ってから、場面が fashionable streets の町角、紳士淑女が買い物に訪れる店先、コンサート・ルーム、旅館 (White Hart Inn) と都会的になることから知られる。

この小都会で Elliot 一家は Camden - place に仮住まいをしている。Kellynch Hall を人に貸して、経済的引き締めをはかるための仮住まいであるから、召使の数も減らし、自家用馬車も持っていないようである。だが、借りた家は baronet の名に恥ずかしからぬ、よい場所にあり、中でも二つある居間は Elizabeth の自慢の種だった。Elizabeth はここで、Musgrove 風の dinner party は「旧式な考え、田舎じみた歓待」(old fashioned notions — country hospitality) (p.219) であると考え、'small, but most elegant tea party' を開き、正式の dinner party を開けない現状をごまかすことができた。このようにうわべだけで、虚栄心を満足させる生活も、都会であれば可能である。土地も tenants もいないからだ。

都会生活のもう一つの利点は、多くの人と会う機会のあることだろう。Bath にはこの作品中の主要人物が殆ど集まって来る。Anne はここで、父親や姉と合流するだけでなく、Mr. Elliot と出会い、旧友の Mrs. Smith との再会も果たしている。さらに、Admiral Croft 夫妻、Wentworth、Musgrove 一家も滞在する。アイルランドの貴族 Lady Dalrymple や貧しい Mrs. Smith、看護婦の Nurse Looke という有職女性も登場し、女性としての Anne の世界はかつてない広がりを見せている。これらの人々は町角で、個人の居間で、出会っては別れ、それぞれの場所へと帰っていく。Laura Place で、Westgate Building で、彼らは孤独な生活を送っており、社交以外には相互の交渉はない。これは都会の大衆の本質であろう。

さて、この「都会」にたいする Anne の反応はどうであろうか。「Anne は Bath が嫌いだった。」(p.14)。しかし、そうはいうものの、Anne は Bath という都会生活の良さを大いに利用しているとも言える。Bath では、Sir Walter が不賛成であるにもかかわらず、Anne は Westgate Building の Mrs. Smith を訪ねる自由を持っていた。Lady Russell と彼女の自家用馬車の恩恵によるとも言えるが、徒歩でも往来の自由な小都会である。Wentworth との再会も、Admiral Croft から情報を得ることも、Bath だからこそできたと言うこともできよう。

このように考えて見ると、個人的な自由という点では、Anne Elliotの方が、Fanny Price や Emma Woodhouse、Elizabeth Bennet よりはるかに恵まれていることは否定できない。Anne は Kellynch Hall を失い、コミュニティという確固とした生活基盤を失ったが、その代わり、個人を拘束することの少ない生活へ入れたのだとも言える。Elliot 家では家族の結び付きさえ、Elizabeth Bennet には思いもつかなかったような希薄さなのだ。もちろん、これにはそれなりの代償も必要で、Anne はかつてない孤独なヒロインである。だが、孤独は別の意味で彼女の世界を広げてみいる。nobody であるということは、誰にも責任がないということでもある。家を失って転々と移動を余儀なくされる Anne だが、また、これほど移動する heroine も珍しいのである。

都会であれ、田舎であれ、個人をとりまく社会というものに対する作者の感覚が初期のころと変わっていることは確かであろう。Austen は *Sense and Sensibility* のように個人を圧迫する社会を、もはや求めてはいない。*Emma* のように逃げ場のない濃密な個人関係を結ぶことにも興味をなくし、むしろ、クールなつながりを求めていると考えられる。

大家族の Musgrove 家の良さも実はそこにあったのである。Uppercross で Anne Elliot は Musgrove 家の密接すぎる結び付きが不便であると呆れているが、全体として、Musgrove 家の包容力は Anne に満足を与えた。大家族の中だったからこそ、Anne は気ま

ずい間柄の Wentworth ともしらぬ顔をして同席することができたのだ。全員を包括しようという大家族主義だからこそ、Anne も Lyme に同行できたのではなかったか。Oliver MacDonagh の言うように、大家族には大家族の欠点もあるが、また、長所もあるのである。縁戚ではあるが、家族ではない、第三者に近い立場の親戚 Anne Elliot にとって、Musgrove 家の関係はそのような、つかず離れずの関係として好都合だったと思われる。そして、このようなゆるやかなつながりこそ、個人が自由に活動するゆとりを生み、Anne と Wentworth を結び付ける結果をもたらしたのである。

このように考えてみると、大家族も、都会の孤独も、Anne の ‘an elegance of mind’ を束縛しないという意味で、価値を見出せると言えるのではないだろうか。

(注)

- 1) テキストは *The Novels of Jane Austen*, vol.V, ed. R.W.Chapman, 3rd Edition. (Oxford University Press, 1933) を用いた。尚、このテキストからの引用はすべて、本文中の括弧の中の数字によって、その頁字数を示している。
- 2) Jane Austen's letter to Anna Austen, dated Friday, 9 September, 1814. See *Jane Austen's Letters*, collected and edited by R.W.Chapman (Oxford University Press, 1979), p.401.
- 3) Austen は Kellynch-hall と Kellynch Hall の二通りの表記をしている。
- 4) Julia Prewitt Brown, *Jane Austen's Novels: Social Change and Literay Form* (Harvard University Press, 1979). See pp.129-130. この中で Brown は優れた *Persuasion* 論を展開している。特に、個人と社会との関連について、本論はここから多くの示唆を受けている。
- 5) もっとも、これは Mr. Elliot が若いころの話で、年をとってから彼の考えは大きく変わる。だが、若いころの彼は title より財産を求めており、財産を得た後になって考えを改めるが、title そのものについての彼の基本的な考えに変化があったとは思われない。
- 6) Jane Austen's letter to Fanny Knight dated Sunday, 23 March, 1817. See *Jane Austen's Letters*, p.487.
- 7) Mrs. Clay は ‘She was a clever young woman, who understood the art of pleasing.’ (p.15) とある。この Mrs. Clay は人に取り入る術は心得ているものの、それは良いマナーとは言えず、Mr. Elliot の good sense とは異なるのである。
- 8) Mr. Wentworth は Captain Wentworth の兄である。
- 9) J.P. Brown, *Jane Austen's Novels*, op. cit., Chap 6. See p.144.
- 10) G.E. Mitton, *Jane Austen and Her Times* (Kennikat Press, 1975), Chap.12.
- 11) Oliver MacDonagh, *Jane Austen: Real and Imagined Worlds* (Yale University Press, 1991). See Chap.5. 本書で MacDonagh は小説からの引用を交え、Jane Austen の伝記的考察を行っている。Chap.5 では家族と *Persuasion* を扱っている。

Summary

Anne Elliot and 'an Elegance of Mind'

Jane Austen claims 'sense' very high among individual virtues. To her, good sense means true sensibility. Intelligence (understanding, reason, sense, etc.) always goes along with feeling (emotion, sensibility, and so on).

Now Anne Elliot, the heroine of *Persuasion*, is depicted as being with 'an elegance of mind'. What does 'an elegance of mind' mean exactly? Is there any difference between good sense and 'an elegance of mind'?

Concentrating on these questions, I will investigate into Anne's solitary situation while she is moving through groups of people. For Anne Elliot, intelligent woman with true feelings, has lost her native home, Kellynch Hall, her father's estate. She is obliged to stay at the Musgroves, the home of a relative, at Lyme where she catches a glimpse of outer world beyond the sea, and finally settles into the elegant city life at Bath. Each group responds her differently according to their own culture.

I will also prove how her sensible mind helped her understand them rightly and how her sensibility worked in the process of her regaining back Captain Wentworth's love which had been lost for 8 years.